具へしめたものの中に、前記の妹脊山や千本櫻のやうなのがあるに止まる。明和安永以後操淨瑠璃の衰微に伴ひ、歌舞伎の全盛を見るに至り、始めて歌舞伎作者の名人も出るやうになつたが、やはり世阿彌や近松の地位に立つ程の大家は出でず、且つ歌舞伎の中心が江戸に移つたので、大和を舞臺とするものが漸次に影を潛めた。（一八・二・一六）

一一　大佛開眼と役行者

一　大佛開眼

造像と建立。聖德太子この方、佛菩薩の造像と堂塔寺院の建立とは、文化史上の重大な事件として代々の記錄を賑はして居り、特に奈良時代がその頂上であつて、飛鳥・藤原の世を後に控へ、平安の代を前に置き、美術史の用語でいへば白鳳期と貞觀期とを前後にして、まことに絢爛豪華な造像時代・建立時代を現じ出してゐるのである。

しかしながら賑はしてゐるのは史書記錄の上だけであつて、文學作品の上には、堂塔の美も佛陀の美も共に歌はれてゐない。神代この方の建築物に就いては「底つ磐根に宮柱太しり立て、高天原に千木高しりて」といふやうな讃歎の言葉もあるけれども、大陸的な規模を以て高大に建造せられた新興の堂塔に對しては、その輪奐の美をたゝへる言葉を遺さ

なかつた。玉に譬へ花によそへて優れた神や人を禮讃してはゐるが、金銅を熔かして鑄造した異國的な佛菩薩に對しては、その相好の圓滿微妙を讃仰する言葉をもたなかつた。萬葉集四千五百首の歌謠は、飛鳥・藤原・奈良の御代の作品であるに係はらず、その代に最も隆盛であつた堂塔・佛像の建造に就いては、殆ど觸れてゐるところが無いのである。

建造物や彫像が文學作家の關心を惹き、詩歌小說戲曲の題材として取扱はれるやうになつたのは、明治年代以後の新しい現象であつて、大和地方の堂塔佛像はこゝに始めて文學作品の對象にせられた。長田秀雄の「大佛開眼」は、その類の文學の最も著しいものの一である。

大佛開眼は大正九年四月、雜誌「人間」に發表せられた五幕十二場の劇であつて、天平十五年　聖武天皇の發願によつて開始せられた金銅盧舍那佛大像の鑄造にからまる技術上・宗教上・政事上・社會上の事件を取扱つて、天平十八年鑄造著手より天平勝寶四年開眼供養に至る七年間における奈良文化の表裏兩面を描き出した長篇の作である。

第一幕第一場猿澤池畔の大佛鑄造御願の燃燈供養の夕相模資人の著京に始まり、第二場

平城京市場における行基の說教に進み、第二幕第一場地獄谷岩窟に大神杜女が藤原仲麿の爲に橘奈良麻呂調伏の呪法を修する怪奇な場面を出し、第二場大佛造營場における大佛の樣式決定に關する論議を點出し、第三場菅原寺に於ける行基の入滅を寫し、第三幕第一場春日野の奥の森の中に若き大佛師託陀眞玉が同じく大佛師にして造營長たる國公麿の娘葛城若女と戀を語る場面を出し、第二場鑄造工事場における鑄造指揮の最中、託陀眞玉が國公麿に使嗾されてゐる楯戸辨麿に刺殺せられることを敍し、第四幕第一場に占星臺上の夜吉備眞備が深刻な事變の起ることを豫知し、第二場手向山の中腹に仲麿の命により奈良麿の家に間者として住込んでゐる相模資人が大神杜女の養女筑紫娘子と戀を語る中、娘子が杜女の秘密を口走らうとして杜女に射殺され、資人は憤激の餘り、杜女を訴へることとなり、第三場藥師寺僧綱所に捕へられた杜女取調の結果、大事件の伏在が暴露しさうになり、資人は苦悶して自害する。第五幕第一場は大佛殿の場で、既に落慶して開眼供養のあつた後、眞玉の死に衝擊せられて發狂した葛城若女が、大佛の掌上に攀上り白衣を月光に照して立つところ、第二場は仲麿、眞備、奈良麿、婆羅門僧正、國公麿が期せずして集つた目

前に、大佛掌上の若女が美しい夢を口走りながら絶息するところで劇が終るのである。

この劇は咲く花の匂ふが如く盛りであつた奈良の都を舞臺として、前古未曾有の巨像を造り、國土最初の大殿堂を建てるといふ史上の大事件を上場し、玄昉（これは影になつてゐる）行基・良辨・玄光・行信、及び海外渡來の唐僧道璿・婆羅門僧仙那・林邑僧佛哲の如き教界の傑物、藤原廣嗣（これは影になつてゐる）同奈良麿など政界の大物と共に、吉備眞備といふ學界の長老をも活躍させ、大佛鑄造の技術家には楯戸辨麿・國公麿・託陀眞玉・高市眞國・高市眞麿・柿本男玉等を動員し、これに宇佐八幡の禰宜尼たる大神杜女といふ妖女、その養女筑紫娘子及び公麿の女葛城若女といふ純情の乙女を配し、大規模の構想のもとに日本文化の時代的動向を象徴的に描出した作である。

初め紫香樂に大佛建立を開始せられた時は、唐土・西域の文化を尚ぶ玄昉の勢威のもとに、その將來せる河内國知識寺の本尊、天竺樣式の盧舍那佛を寫すことになり、楯戸辨麿がこれに當つたが、健駄羅樣式を採らうとする國公麿に妨害せられて成功せず、その他錯

綜した事情があつて遂に中止となり、辨麿は失望の極狂氣のやうになる。今回は公麿が造營の命を受けて健駄羅樣式を寫さうとし、教界では道璿、政界では橘一門の支持はあつたが、技術家の提出した雛形によつて論議を進めると、當時稱名念佛を主唱し、本地垂迹を說き、日本的な佛教を精神界に樹立して　聖武天皇の御信任を得てゐた行基が、盧舍那佛は天竺に在つては天竺の人と現はれ、日本に在つては日本の人と現はれて、その國の衆生を教化し給ふのだといふ考から、託陀眞玉が日本人に象つた獨創的な樣式に造りなした雛形を採るべしと主張して、衆議を一決したので、遂に眞玉の原型によつて公麿が造營に當ることになつた。こゝに深刻な葛藤の根柢が潜み、　聖武天皇の御後嗣に關する橘氏對藤原氏の摩擦にからんで、對立抗爭が錯綜して行はれ、公麿の惡辣な策謀によつて眞玉は横死し、葛城若女は狂氣するに至り、その間　天皇の御讓位、行基の入滅があつて、既に鑄造半ばに達してゐる大佛にも、屢〻樣式變改の議が持ち上り、公麿が使嗾した大鑄師等の妨害もあつたが、工事は依然として眞玉の原型に從つて進み、遂に天竺にあらず、健駄羅にあらぬ日本の盧舍那大像がすべての葛藤を超えて出來上つたのである。

この劇は奈良時代にあつた史實を舞臺に再現するといふ意味での史劇ではなくして、外邦渡來の文化と日本國民の創造に成る文化との關係についての作者の解釋を、奈良時代の人物を借りて表現したものである。故に各人物の思想及び行動は史實そのまゝでなくして、作者の創作にかゝる。作者は日本文化に對する異邦文化の刺戟は唯刺戟として受入れられるに止まり、長く將來に殘つて日本文化の動向を示すものは、やはり日本そのものの表現であらねばならぬとするので、この考を大佛建立の時代に當てて描いて見たのが卽ちこの戯曲である。

日本文化についてのこの見方は、唯今では普通に行はれるところであるが、大正九年の當時では特に注目に値するものであつた。これを談理一偏に走らしめると、劇としての潤ひを缺くことになるが、この曲は詩味を全篇に漲らしめて程よく調和し、理趣情趣相俟つて興味深い作品になつてゐるのである。（一八・三・二）

二　役　行　者

奈良を舞臺とする大佛開眼に對して、吉野を舞臺とする役行者を取上げる。大和の南北兩地域から選手のやうに目指される奈良と吉野とを事件の場面とするからである。時代も亦大佛開眼の奈良時代に對して、役行者の飛鳥時代は、上代文化の躍進を記念すべき貴重な年代であるから、これを並べ取扱ふのに必ずしもふさはしからぬものでないからである。

役行者は、坪内逍遙が大正二年文藝協會を解散し、その畢生の事業として心身をうちこんだ國劇建立の運動を起すべき母體を自ら撤收するに至つた當時に、その草案を書き始め、大正五年女魔神と改題して雜誌新演藝に載せ、六年修正加筆して役行者と改題出版し、十一年實演用たるべく改作し、行者と女魔と改題して新演藝に載せた新作脚本である。

この脚本は大正十五年に小山内薫の演出で築地小劇場に上場したのが初演で、後に帝國劇場で再演せられ、更に寶塚國民座で公演三回に及んでゐる。のみならず遠く海外フランスに飜譯紹介せられて、斯界の絶讃を受けたと傳へられてゐる。

作品としては逍遙一代の劇作の中でも最も特異なもので、桐一葉を初作とする史劇の系統に出たものでもなく、新曲浦島を初とする振事劇の流れでもなく、日本靈異記等に見え

る役行者の古傳說（大和に關する短篇物語の條參照）を種に、自由無礙の創意を加へて、人物にも事件にも夫々の思想を寓し、それが象徵となつて實人生の現象を暗示するやうに創作せられた象徵劇である。この種の作は逍遙の劇作の中に特異であるのみならず、あらゆる新劇の中にも類例が見當らぬ。

大和國の大峰に葛城と一言主といふ母子の魔神が住んでゐた。一言主は野獸の生膽を食つて通力を養つてゐる人首獸體の怪物であり、葛城は半身裸女半身獸體の女魔である。一言主は大峰の主として、荒れに荒れて人間を害し禽獸を屏息せしめた。法力絕大な活神役行者は、之を祈り伏せて驅使したが、尙も橫著を止めないで岩橋架設の役にも出て來なかつたので、遂に西谷の大樟に呪縛して谷一圓を封鎖した。爾來この界隈が靜謐になり、人間も安んじて生業に就いた。

封鎖の谷を窺ひ、行者の禁誡を破る徒は、呪縛の魔神の强烈な詛ひに惱亂せられ、谷底に陷つて死する者があり、それが溪流に流されて麓の里に出るので知られる。行者の弟子の中にもこの徒があつた。行法の峻烈であり、人間的な欲情を取拉ぐ荒行の嚴峻さに、風

を聞いて來り集まつた者も、迷を起し詛ひに引かれて、谷川に陷り山を下るのが少くなかつた。

それらの中に飛鳥京の一靑年韓國廣足といふのがあり、道念堅固な修行者であつて、行者の留守中など、封鎖の谷を預かるほどになつて、唯一人踏止まつてゐたのであるが、一言主が母葛城の助勢を得て又々荒れ出すに及び、ふと禁誡の西谷に足を入れ、好奇心と驕慢心との爲に深入りして、つい半人半獸の魔神を見、惑亂せられて恐ろしい呪詛の言を聞いてしまつた。

獸の生血に養はれるおれだ。自然に生き、本能に生きるおれだ。本然の性を僞つてゐる人間の意氣地なしとは違ふのだ　己を立て己を張るのが自然の定めぢや。利他や濟度やは臆病な人間が强い者を防ぎ己を庇ふ爲に工夫した自儘の掟ぢや。仁や愛が何だ。自分の御都合で人間の作つた狹い道だ。おれは魔王になつて人間を滅絕しよう。

廣足は詛はれてその氣になり、取返しのつかぬ返事をしてしまつた。そして惱亂して谷川に墜ちて氣絕した。

麓の百姓達に救はれて蘇生し、大熱を病んで農家に逗留する中に悟りを開いた。それは行者の難行に對する易行の道である。廣足はかう思つた。

行者の教は高く偉きく、尊く嚴しい。行者は「人は卽身活神になるやうに修行せよ。二六時中金剛藏王の御姿を眼から放すな。我執貪著の妄想を去り、苦行荒行に肉を摧き、唯一心に精進せよ」といふ。されど下根の衆生は神に遠くして獸に近く、却つて聖教を怖れ忌む。之を救ふ方便として先づ神獸一如と說き、天性の獸を礎にしてその上に神の靈德を築くべきを說きたい。行者のやうに、强ひて性を矯め情を殺し肉を滅ぼす力のみを得ようとするのは、冷い酷い神格を修行するだけで、とても凡人の堪へ得るところでない。

廣足はこの見地に住して百姓達に說教し、加持祈禱で病を治することもした。更に都に上つて飛鳥の　主上の御惱を治し奉り、萬民の心身を治しようと思ひあがつた。それで行者に暇乞をする爲に山に上つたが、行者はすべてを洞見して一喝を加へた。

神獸一如は力の人にして始めて體得し得る。汝如きは、獸に墮落するばかりだ。そして一方では神の道を學んで心身の病を治するといふ。それは中途半端の半神半獸道だ……獸性を檻に入

れて仁義で縛るのは唐人の道、我は直ちに神となることを努める。それには獸を征服する力を必要とする。非力の汝に何の教化ぞ……小智慧・名聞慾・驕慢。一言主の邪見に惑うて拔差ならぬ一言を吐き、女人の愛執に心動いて浮世心がつき、こゝに神でもなく獸でもなく、はた眞人間でもない中途半端の理窟になつたのだ。神にはなれず、獸にもなり切れねば、せめて眞人間になれ。

廣足は叱られて深く自ら省みた。行者の道は嶮しくして高く、自分には及びもつかない。さればといつて本能に從ひ性に殉ずる獸にもなりたくない。そこで自ら欺いてあんな小理窟をこしらへて見た。やはり名聞と驕慢と卑怯と横著から出た附燒刄の生悟りだと氣が附く。そこへ女魔葛城は廣足を戀する農家の娘に化けて來て、神の名に迷ふなと誘惑する。

さうしてゐる中に、役行者の身の上に一生の大障害が湧いて來た。唯一人の老母が行者故の難儀に遭うたのである。都では役行者を邪法魔術の宣傳者として、武力で除かうとする反對者があつた。朝廷を動かして討手をさしむけ、老母を人質にして威嚇を試みたのである。さすがの行者もこれには惱んだ。五十年の修行を一日にして破らうとする苦痛に直

面した。しかし行者は決然と恩愛の執を棄てた。一切塵縁の中の最後の一筋を絶ち切つた。天上天下有るものは大なる我、大なる力。廣足が走せ來つて老母の危急を告げたが、もう動じない。廣足も致し方なく思ひ切つて暇を乞うた。

神の道はこれほど峻しい酷い冷いものであらうか。自分は到底神にはなれない。神になれんものが神の道を說いて萬民を濟ふなど、さかしらの極である。行者の叱るのも無理はない。されば、といつて獸性の一方に馳せて、思ひきつた本能生活をする勇氣はない。行者が臆病者といつたのも無理はない。自分の行く道は人間の道の外にない。中途半端の法道でもなければ不徹底な魔道でもない。眞人間の道を志すべきである。自分は即時都に歸る。

かうして廣足は山を下るのであるが、行者は鼓角の響・劔戟の音・山鳴り凄い光景の中、老母の身に白刃が迫る危機に臨み、孔雀經を誦し、更に眞言を誦し、岩窟の上に立つ巨巖に一喝を加へると、山谷震動岩石崩碎して、金剛藏王の一大忿怒形立像が現出した。同時に行者はこの巨大な力の象徵を殘して、一片の白雲に乘じ遠く神飛し去つた。

如上の筋が三幕六場に脚色せられ、第一幕第一場は山村路で、行者の老母が從者靑蟲に

保護せられて行者に逢ひに行くところ、第二場は山麓の一軒家で、老夫婦と娘二人が大峰山中の行者と魔神との由來を話してゐると、靑蟲主從が辿り著いて、行者の他行中であることを聞き、失望の涙にくれて歸り去り、そこへ樵夫が韓國廣足の溪川に墜落して氣を失うてゐるのを運んで來て蘇生せしめるところ、第二幕第一場は大峰山中密林の夜、行者の使者前鬼後鬼が行者の留守中を守り、廣足の山麓での動靜を語るところ、第二場は西谷魔所で、深山の溪谷に於ける密林の中、樟の巨木に呪縛された一言主が苦しみもがいて物凄く唸り、あたりに躍り廻る妖怪共を叱咤し、猛獸の生血を喘ぎ求める所へ、女魔葛城が現れて之をいたはり、人間を呪ひ行者を詛ふところ、第三幕第一場は大峰山中で、行者召捕の武官が洞川（どろかは）の樵夫に行者の窟へ道案内を命ずるところ、第二場は山上嶽の岩窟で、行者が結跏趺坐してゐる所へ、廣足が暇乞に來て行者に一喝せられ、悔恨苦悶してゐると、女怪葛城が一軒家の村娘になつて現れて、廣足を誘惑して山を下らしめる。一人殘つた行者が老母を思ふ心の動搖を感ずる所へ女怪は更に美女となつて妖艶な誘惑を試みたが、大喝して之を斥けると共に、最後の執著たる母への塵緣も絶ち、再び來つて討手の急迫と老母

の危難とを告げた廣足をも斥けて、今までの石龕に祀つてゐた柔和な御相の彌勒像を谷底へ抛ち、前鬼後鬼が葛城の西谷侵入一言主の狂暴を告げるにも耳を假さず、金剛藏王の巨像を岩窟の上に殘して、大天井嶽の彼方に飛行し去るところで幕を閉ぢるのである。

實演用として改作を施した行者と女魔は、右の構成を稍變へて、第一幕第一場を大峰山中として、廣足が禁制の西谷へ足を入れるところ、第二場は谷川の岸邊で、廣足が溪川に押流されて麓の農家に救ひ入れられ、村娘父子に介抱せられるところ、第二幕は西谷の魔所で、一言主呪縛、妖怪跳梁、女魔侵入の場、第三幕は洞川村から餘り遠くない山路で、廣足が老農夫と娘との好意で健康を回復し、前鬼後鬼の止めるのも聞かず、行者の岩窟に行かうとする、同時に都からの討手が山麓へ押寄せ、折から登山しようとした行者の老母を捕へる場面、第四幕は山上嶽の岩窟で、大要前掲役行者第三幕第二場と同樣の場面を出して幕を閉ぢることとなつてゐる。

かうして自然力・野蠻性・肉體力を克服して行く精神力・修行力・內面力の偉大さを象徵的に描寫して、特異の結構と表現とを試みた豪快な作品となつてゐるので、當時文壇に

用ひられた分類による史劇でもなく、又社會劇でもなく、はた作者逍遙の創案した新樂劇にもなつてゐない、いはば一種の象徵劇であつて、その象徵するものはいろいろの人生相に亙り、各種の觀點からその比興を味ひ取ることが出來るのである。

これを人間の生活相に當てて見れば、葛城と一言主とは本能的な獸性生活を具現するものであり、韓國廣足の言說は不徹底な人間性生活を說くものであり、行者の廣足に敎誨したところは卽ち眞實に徹した人間道といふべきものであつた。而して行者自身は難修行によつてのみ確保せられ得る神性生活を體現するものである。これを人生觀に充てて考へ、又文學觀に當てて考へて見ても、同樣な象徵的意義が感得せられるのである。

本曲は種を古傳說に取つてゐるものの、その取扱は不羈自由で、行者其人も、弟子の前鬼後鬼も、韓國廣足も、はた男女の怪魔神も、悉く作者の構想によつて適宜に性格を與へられ、思想を賦せられ、行動をさせられる。描き來る事件は旺盛な空想力で怪奇の限りを盡し、事件の行はれる場所も、自在な想像力でものすごさの極みを盡すやうに書かれてゐる。吉野山を描いて本曲のやうに怪奇に神秘に凄壯に敍したものは未だ曾て無いのである。

谷底から見上げると、右手も左手も削つたやうな千仞の絶壁である。右手の手前などはその絶壁の頂に樹木が繁茂してゐるため、空を遮つてしまつて、高さの知れぬ六枚折を不揃に開きかけて立てたやうに、岩角が出つ入りつ重なりあひ、聳え立つてゐる。ずつと離れた左手の絶壁の一部は、餘り久しからぬ以前に、激しい山崩れがあつたらしく、あちこちに大小の岩石が樹木をへし折つて轉げ落ちたまゝ、重なりあつて斜地を形作つてゐる。この斜地の頂から溪へ臨んで、掩ひかゝるやうになつてゐる樟の大木、幹は根本では十抱へもあらう、それが根から二尺ばかり上で四つ股になつてをり、更に三四尺上の所で四つ股に分れて、東西南北へ會釋もなく、その長い逞しい大枝を張出して、その一枝一枝がまた幾條にも分れ分れて、當面の溪の上殆ど一ぱいに掩ひかぶさつてゐる。

これが魔神一言主が呪縛せられてゐる西谷の舞臺面であるが、吉野大峰の實景がどうであらうと、それにいさゝかも拘泥しないで、全く自在な想像力でもの凄い妖魔境を創造したのである。たゞに櫻の吉野山と異なるのみならず、あらゆる歌書軍書の吉野山にもその類を絶した神怪幽闇の界として描かれてゐるのである。（一八・六・五）

二　新しい分野

薄田泣菫の詩集「白羊宮」にあゝ大和にしあらましかばと題する詩がある。四十行ほどの長詩で、法隆寺の伽藍に古文化の匂を身にしめ、信仰と藝術との殿堂をあこがれうかゞふ心もちを詠んだ作である。

ああ大和にしあらましかば、
いま神無月、
うは葉散り透く神無備の森の小路を、
あかつき露に髪ぬれて、往きこそかよへ、
斑鳩へ。平群のおほ野、高草の
黄金の海とゆらゆる日、
塵居の窓のうは白み、日ざしの淡に、

いにし代の珍の御經の黄金文字、
百濟緒琴に、齋瓮に、彩畫の壁に
見ぞ恍くる柱がくれのたたずまひ、
常花かざす藝の宮、齋殿深に、
焚きくゆる香ぞさながらの八鹽折
美酒の甕のまよはしに、
さこそは醉はめ。
夕影靜かな塵外の一境に、聞き入る讀經の聲は、深く深く魂に徹するのである。
新墾路の切畑に、
赤ら橘、葉がくれにほのめく日なか、
そことも知らぬ靜歌の美し音色に、
目移しのふとこそ見まし、黄鸝の
あり樹の枝に矮人の樂人めきし

戯ればみを。尾羽身がろさのともすれば、
葉の漂ひとひるがへり、
籬に、木の間に、――これやまた野の法子兒の
化のものか、夕寺深に聲ぶりの
讀經や、――今か、靜こころ、
そぞろありきの在り人の
魂にしも沁み入らめ。
五重の高塔にも殘照薄れて、夢殿の廊に落葉かそけく音する頃、菩提樹下の道行く者は、
そゞろに推古の昔に在る思いをするのである。
日は木がくれて諸とびら
ゆるにきしめく夢殿の夕庭寒に、
そそ走りゆく乾反葉の
白膠木、榎、楝、名こそあれ、葉廣菩提樹、

道ゆきのさゝめき、諳に聞きほくる
石廻廊のたゝずまひ、ふりさけ見れば、
高塔や、九輪の鑄に入日かけ、
花に照り添ふ夕ながめ、
さながら緇衣の裾ながに、地に曳きはへし
そのかみの學生めきし浮歩み、——
ああ大和にしあらましかば、
今日神無月、日のゆうべ、
聖ごころの誓しをも、
知らましを、身に。

このやうな題材の詩歌にうたはれることになつたのは、全く新時代の現象で、大和の堂塔伽藍をかうした眼で見つめたのは、明治の世に發生した新文學が始まりである。ひとり堂塔伽藍のみならず、その中に納まつてゐる佛菩薩の彫像も亦詩歌の對象となり始め、これ

を讃美詠歎する作品が續々と現はれた。

かうして大和は、自然と歴史との外に詩美の源泉たるべき豐富な題材をもつことになり、名勝史蹟で文學の士を引きつけてゐた大和が、古代藝術の遺作遺品で詩文の世界に再出發をすることになつた。萬葉集や懷風藻のいにしへにあつては、歌によみ詩に作るものとはかけても思ひ及ばなかつた伽藍や佛像が、あくがれ心地で慕ひよる新代の歌人詩客によつて、諷詠の對象と扱はれることになつたのである。

古代文化の遺品を鑑賞してその美趣を歌ふことは、文學作品の内容としては必ずしも新しいものではない。しかしながら藝術作品として建造物を眺め、美的彫刻として佛像を觀ることは、全く近代の修練に出づるもので、しかもこれを詩文に取入れることは、又文壇新興の現象に屬する。この新興の現象がたまたま古藝術の淵叢たる大和を舞臺として登場するに至つたのである。

この現象は繪畫の世界にもあつて、大和の堂塔や佛菩薩が畫題に上ることになつたのであるが、文壇では新體詩を先驅として、短歌にも現はれ、紀行隨筆にも推及んでゐる。畫

家が「天平の面影」と題した油繪に、箜篌を抱いて園べに立つてゐるうら若い女が描かれてあつた。肩には比禮をかけ、赤裳の裾を地に引いてゐた。園には桐の花が咲いてゐた。

詩人は又この繪を詩題にして

　　徂きしは千歳か、塵か、わがたわやめ、
　　まなざし深くにほふは夢か、あはれ、
　　そのかみ榮ありし日の世はさながら
　　けふしも君が姿にあくがれよる。（有明詩集）

とうたふのである。

「法隆寺に巡禮の杖を曳く人々は、其の淨境の一角において、更にひそやかに且つ清楚な一境をなす中宮寺に詣でるであらう。そこに沈靜の極みと柔和の至りとを示すやうな如意輪の半跏像が安置せられてある。その右肱を右膝にたてて、心もち右に傾けた頰を輕く指先に支へ、切長の兩眼を伏し目に開いて見おろしたまふ御姿は、およそ參拜の衆生を慈悲の光に包まないではおかぬであらう。

　　おん頰にかそかににほふほゝゑみのかしこかれども親しき御佛　　佐々木信綱

如意輪の慈光に對しては、景氣の善い事の好きな清少納言でさへも「人の心をおぼしわづらひてつらづゑをつきておはする。世に知らずあはれにはづかし」（枕草子佛はの條）と言つて、これに光被されずにはゐられなかつた。清少納言の拜んだのはどこの如意輪であつたかはわからないが、若しこの稀世の尊像に直面せしめたなら、さすが精悍の氣象者も、かしこかれども親しき慈容に頭を下げ、あはれにはづかしい麗相に面を伏せたであらう。

かうして大和の國文學は、更に廣大な新分野を拓くに至り、自然と人生との外に藝術といふ題材がこの國の文學を一層多彩なものにならしめたのである。（一八・六・一〇）

口繪說明

西本願寺本萬葉集

西本願寺本萬葉集は今佐々木信綱博士の所藏で、鎌倉時代後期の書寫に成る。圖は卷一輕皇宿于安騎野時柿本朝臣人麻呂作歌の反歌四首と藤原宮之役民作歌一首とを縮刷したもの、原本にある朱字の註記が本文と一樣に黑く出てゐる。

芭蕉翁吉野旅行

芭蕉の吉野行脚の姿を描いた彩色繪で、ひとつぬきてうしろにおひぬころもがへ　はせをと題句があり、元祿九丙子歲秋九月圖　曉氏跋翅と落欵がある。跋翅は蚊足の別號かといふ說もあれどその何人なるかは詳でない。菊本直次郎氏の藏幅である。

奈良の晒し場

大和名所圖會添十郡の卷奈良晒の作業を描いた場面で、今の奈良市の北西部佐保川添の地域に當る。浮世草子に奈良の重要產業として富源の隨一のやうに描かれてゐる晒布は、かうして生產せられるのであるが、今はこの地に見られぬ光景である。

妹脊山婦女庭訓の番附

明和八年正月竹本座擬淨瑠璃興行初演の番附で、繪の上は四段目の奧杉酒屋の一場、道行戀の苧環、下は同詰入鹿御殿の一場、寶劍龍變して脫出するところ。

昭和十九年二月十五日　印刷
昭和十九年二月廿日　發行　（三、〇〇〇部）

（出版會承認番號 い 260706）

定價 壹圓五十錢
特別行爲稅 十錢
賣價 壹圓六十錢

著者　奈良市法蓮町一三一五　岩城準太郎
發行者　奈良縣丹波市町三島　岡島善次
印刷所　奈良縣丹波市町川原城　天理時報社
製本所　右代表　岡島善次
發行所　奈良縣丹波市町川原城　天理時報社
振替大阪　二八四二一
會員番號　一一九五〇一

配給元
日本出版配給株式會社
東京都荏田區渋谷路二ノ九

984
126

終